令和元年度第２回横浜環境活動賞審査委員会　会議録	
日　　時	令和２年２月 21 日（金）10 時 00 分～16 時 45 分
開 催 場 所	関内中央ビル３階　３Ａ会議室
出　席　者	戸川孝則委員長、北村亘委員、石原信也委員、川村久美子委員、鈴木智香子委員、為崎緑委員、吉井肇委員
欠　席　者	なし
開 催 形 態	公開（傍聴者なし）
議　　題	１　応募者プレゼンテーション及び審査 ２　生物多様性特別賞審査 ３　第 27 回横浜環境活動賞受賞候補者の決定
決 定 事 項	１　委員長に戸川孝則委員、委員長職務代理者に北村亘委員が選任された。 ２　以下の団体が、第 27 回横浜環境活動賞受賞候補者として決定した。 (1) 市民の部 ア 大賞 NPO 法人　海の森・山の森事務局 イ 実践賞 荏子田太陽公園愛護会 大岡川夢ロードデッキサポーターズ 上星川グリーンアッププロジェクト グリーンバード横浜南チーム 一般社団法人 里海イニシアティブ ＮＰＯ法人　道志水源林ボランティアの会 とつかエココーディネーター協議会 なか区民クラブ：バラ教室部会 特定非営利活動法人　ぷらっと 美里橋サークル みどりと水を守り育てる「地域環境向上委員会」 (2) 企業の部 ア 大賞 株式会社協進印刷 イ 実践賞 株式会社ダイイチ 太陽油脂株式会社 株式会社タツノ　横浜工場 生活協同組合ユーコープ (3) 児童・生徒・学生の部 ア 大賞 横浜市立金沢小学校 イ 実践賞 横浜市立小机小学校　サクラソウプロジェクト

	(4) 生物多様性特別賞 横浜市立小机小学校　サクラソウプロジェクト
議　　事	**1　委員長の選定及び職務代理者の指名** （事務局）これより議事に入ります。委員長の選定及び職務代理者の指名です。運営要綱第２条第４項により、委員長が会議の議長として議事を進めることとされていますので、委員長が選任されるまで事務局が進めさせていただきます。運営要綱第３条第１項により、委員の皆様の互選により、委員長をお選びいただきます。ご推薦がありましたら、お願いいたします。 （北村委員）戸川委員を推薦します。 （委員）異議なし （事務局）ご推薦がありましたが、戸川委員いかがでしょうか。 （戸川委員）了承 （事務局）では、戸川委員に委員長をお願いします。続きまして、運営要綱第３条第３項により、戸川委員長より、職務代理者のご指名をお願いいたします。 （戸川委員）北村委員を指名したいと思います。 （北村委員）了承 （事務局）では、北村委員に委員長の職務代理者をお願いいたします。 以降の議事進行を、戸川委員長よろしくお願いいたします。 **2　応募者プレゼンテーション及び審査** （戸川委員長）審査委員会の進行について、事務局から説明をお願いします。 （事務局）委員の皆様には応募書類を事前にご覧いただいていますが、応募者の方のプレゼンテーションも踏まえて受賞候補者を決定していただきます。 これより、応募者の皆様にプレゼンテーションを行っていただきます。プレゼンテーション終了後、質疑応答、意見交換を行います。プレゼンテーションは企業の部、市民の部、児童・生徒・学生の部の順に行います。 審査委員の皆様は、意見交換の後、お手元の事前採点表の点数を修正してください。採点表は各部門の採点が終わるごとに事務局で集めて集計します。 なお、市民の部では、審査の途中で休憩がありますので、審査にかかわる情報の保護のため、採点表は、休憩に入る前に事務局で集め、審査会再開時に委員の皆様に返却します。 25点満点中平均点15点以上を実践賞の候補者とし、最高得点を大賞の候補者とします。生物多様性特別賞については、事前審査にて各委員１者を推薦していただいています。推薦のあった応募者について討議し、討議内容を踏まえ、再度ふさわしいと考えられる応募者を１者、選んでいただきます。プレゼンテーションの順番は資料のとおりです。順番に事務局からお呼びします。プレゼンテーションの時間は３分間、質疑応答の時間は５分間です。質疑応答終了後、発表者の方はすみやかに自席にお戻りください。プレゼンテーションにおいては、スクリーンの使用、追加資料の配布はできません。活動内容を紹介する写真や工作物等を手に持って審査員に提示することは可能です。事務局からの説明は、以上です。 （戸川委員長）今の説明に対し、審査委員の皆様、応募者の皆様、何かご質問がありますでしょうか。ないようですので、プレゼンテーションを始めたいと思います。

	(1)　企業の部 株式会社協進印刷 （応募者）プレゼンテーション ＜質疑応答＞ （為崎委員）貴社は従業員数 11 名と小規模なので、一丸とならなくては環境の取組などを行うことはできないと思いますが、11 人が一糸乱れず、皆が思いを一緒にするこつはありますか。 （応募者）当社では「ありがとうの日」という企画を続けています。従業員がペアになり、月に一回、ステークホルダーに日頃の恩返しをしようという企画で、制作物プレゼント、広報、近隣の清掃、環境セミナーなどを行っています。それにより従業員に当事者意識が芽生えて、内勤が多いオペレーターや職人もお客様と積極的に関わるなど、皆の意識が変わってきました。 （北村委員）先ほど新しい取組を考えているとおっしゃっていましたが、次に何か展開しようとしていることはありますか。 （応募者）ロダクトとして紙で作れるものはほぼ出尽くしていますので、ソフト面を考えています。イベントや学校との連携などでの活用です。例えば、小学校出前授業での環境活動において、再生品（古紙や古布など）を利用できるような仕組み作りや、イベントでの再生品提案などです。 （川村委員）リユース封筒を利用しているお客様は、利用していることについて宣伝されているのですか。 （応募者）はい。毎回、説明資料を 1 枚挟んでおられます。 （為崎委員）先ほど、環境に貢献しながら利益を得たいとの発言がありました。環境への取組には経営面での体力が必要だと思いますが、業績で利益を出さないといけない中で、社会貢献とのバランスをどうとられているのでしょうか。 （応募者）業界はマーケットが縮小されています。さらに環境活動で利益得るための仕組みは、まだ多くはできていません。ただ、変革を始めて 10 余年、CSR を考え続け、環境活動は企業に課せられた責任だと感じていますので、より早くバランスが良くなるよう、継続していく所存です。 ＜意見交換＞ （戸川委員長）印刷業者は損紙が多く出るので、損紙の使い方は非常に重要だと感じています。 （為崎委員）先ほど申し上げたとおり、11 人規模で環境への取組を行うのは非常に大変な中、デザイン性に優れた商品にして、お金になるような持続可能な仕組みを小規模でありながら構築されているところが非常によいと思いました。 （川村委員）小さな会社ですのでアイディア勝負になると思いますが、うまく吸い上げて WIN-WIN というか、いろいろなところが WIN となっていることがすばらしいと思いました。 （鈴木委員）子どもたちにとってもわかりやすい取組なので、小学校と一緒に行う

	これからの活動も楽しみです。 （戸川委員長）今、小学校では総合の時間など、年間を通してのカリキュラムがあるので、そういうところにリーチしているのはとてもすばらしいと思います。 （石原委員）従業員 11 人が常に環境保全を意識していて、中小企業でありながらほかの模範となる環境活動を率先して行い、小学校や地域との連携を積極的に図るという姿勢が評価されるべきだと思います。 （委員）**採点** **株式会社ダイイチ** ※応募者都合により欠席のため、審査委員による審議のみ。 **＜意見交換＞** （為崎委員）「パチッとパンツ」という商品、便利だと思いますが、この商品が環境に配慮しているという事実について購入者がどれだけ認識しているのか気になりました。商品としてはすばらしいですが、伝わり方や伝え方はどうなっているのでしょうか。 （北村委員）「BRING」というプロジェクトに取り組んでいますが、会社独自で行っているわけではなさそうなので、業界全体でどの程度浸透しているのか、またこの会社がどの程度関わっているのか、ということを聞けるとよかったです。 （戸川委員長）私の知る限りでは、「BRING」は日本環境設計さんが実施している仕組みで、ダイイチさんも比較的早期に取り組み始めており、徐々に他社に浸透してきていると感じています。 （川村委員）事前質問で聞いたところ、2010 年から開始されたとの回答がありました。 （委員）採点 **太陽油脂株式会社** **（応募者）プレゼンテーション** **＜質疑応答＞** （為崎委員）石鹸教室をいろいろなところで開催されていて、横浜 FC とも連携されていますが、サッカーチームとのつながりはどのように作られたのですか。 （応募者）最初、横浜 FC さんから一緒に環境の取組を行いませんかとのお声がけがありました。エコパートナーというかたちで参加しています。その取組の中で足長ドリームシートというものを企業で買い上げて、障害のある方々などに利用してもらうということを従来から行っています。 （為崎委員）ほかにも学校等で石鹸活動を行っておられますが、どういうところで行うと一番インパクトがあって、影響力が高いとお考えですか。実施場所によって効果の違いはありますか。

	（応募者）どちらかというと、顧客先である生協様から石鹸教室や勉強会開催のお話をいただいて、私たちが出向いて行うことが多いのですが、最近ですと近所の小学校３年生に環境教育の一環として受講していただいた実績があります。 （北村委員）石鹸教室はすばらしいと思いますが、最近の子どもは石鹸を使わず液体石鹸を利用する傾向にあるように感じています。石鹸教室に代わる新しいものをお考えになっているのか、または石鹸教室への子どもたちの参加状況に関する印象をお聞かせください。 （応募者）石鹸教室では、自分だけの石鹸を手作りするということで、自分好みのフレグランスを入れて、型に入れて思い思いの形の石鹸を作り、持ち帰って使っていただくということを楽しんでもらっています。一人ひとりの好みの手作り石鹸を楽しんで作ってもらっているので、気に入って使用していただいていると思います。 （北村委員）子どもたちにも楽しんで使ってもらえる工夫がなされているということですね。RSPO の認証マークが 40 種類くらいの製品についているということですが、ついていない商品には何か理由があるのですか。 （応募者）原料が数量の関係で入手できないですとか、また、そもそもパームが入っていないものもあります。そのため、来年度から始まる中期計画において、RSPO のマークを取り入れることを更に進めていこうと動いています。 （川村委員）貴社だけでなく業界団体等で SDGs に取り組んでいると思いますが、欧米に比べて日本では持続可能なパーム油の取組が遅れていると感じます。何か要因があるのですか。 （応募者）要因として NGO の方々がおっしゃっているのは、ヨーロッパでは教育面が充実しているということです。当社としても教育面でできることがないかと考えていますが、教育の面が非常に大きいと思います。 （鈴木委員）生協での石鹸の取組を長年聞いているので、古くて新しい課題だと思っています。先ほど石鹸を使うのかとの話も出ましたが、流れとしては盛り上がっているのでしょうか。環境の話、パーム油の問題などもありますので、盛り下がるということはないとは思いますが、実際の傾向としてどちらなのでしょうか。 （応募者）傾向としては、固形石鹸の消費は減少し、取り扱いやすい液体石鹸の消費が伸びています。しかし、肌敏感の方には重宝していただいているので、そこからの展開を狙っていきたいと思っています。 **＜意見交換＞** （鈴木委員）古いけれども新しい流れではあると思います。若い母親は逆に石鹸という風潮があるのではないかと感じています。 （為崎委員）企業として RSPO の取組を実施する一方で、消費者に向けて石鹸教室を行うなど、偏りなく取り組み、いろいろな人の理解と自社の活動の促進というバランスもとれた取組だなと感じました。 （戸川委員長）消費者がパーム油のことを知らず、だから消費者庁が動いていて、それほど大切な問題なのですが、なかなか日本では伝わっていません。高いハ

	ードルの課題に立ち向かっていくのはすばらしいと思います。 （川村委員）今おっしゃっていた意味で、教育も大事なことです。業界団体の中でも一生懸命取り組んでおり、消費自体を広げるためにも教育に取り組んでいるというのはよいことです。 （委員）**採点** **<u>株式会社タツノ　横浜工場</u>** **（応募者）プレゼンテーション** **＜質疑応答＞** （為崎委員）長い間環境問題に取り組んでいるとのお話でしたが、そもそも環境に配慮しなければいけないと考えたきっかけは何でしょうか。当時の代表のお考えでしょうか。 （応募者）エネルギーとしてガソリンは非常によいものですが、将来枯渇する日がくるでしょう。当社は 100 年前からエネルギーを供給する機械は作ってきましたが、これからは環境によいものを作っていこう、水素や LNG、CNG、LPG など炭素の少ないものを車に供給しなくてはいけないというトップの考えからです。 （為崎委員）ベーパー回収型のスタンドを作っていらっしゃる企業は国内でどれくらいあるのでしょうか。いろいろなところから視察に来られたりするのでしょうか。 （応募者）日本において、ベーパー回収型の計量機を作っているところは３社しかありません。ガソリンを給油する際に発生するガソリンベーパーを大気へ放出することは環境によくないのですが、世界的にみると、日本は非常に遅れています。東南アジアでも回収する方向に向き、アメリカでは車からベーパーを出してもいけないことになっています。日本ではやっと回収を奨励する動きがでました。そこで、当社を含め、現在は３社が作っています。 （北村委員）ショールームで勉強会を実施しているのとのことですが、具体的な内容を教えてください。 （応募者）小学生と高校生では知識の差がありますが、一つは石油がどうやってできるかについてです。最近は地球温暖化のため CO_2 を削減しようという動きがありますが、知識が乏しい方もいます。例えば、電気自動車がよい言われますが、日本の電気はガソリン、LNG、石炭が 85％を占めています。このままでよいのか、これからどういうものを作っていかなくてはならないのかについて、実際の水素供給計量機や LNG 計量機を見たり、水素自動車に乗って体感したりして、勉強してもらっています。 （川村委員）貴社の高圧水素ガスディスペンサーの市場におけるシェアはどれくらいですか。 （応募者）日本においては、水素ステーションはまだ 110 箇所くらいですが、そのうち半分ほどが当社です。

	（川村委員）技術的にほかと違うところはありますか。 （応募者）車に入れる水素は 70～80MPa（メガパスカル）と非常に高圧で、そのための安全基準に対応するため、水素供給計量機のノズルは重くて取り扱いづらくなりがちです。当社は軽くて扱いやすいノズルを開発しました。水素の計量法は未だ確立されておりませんが、早い確立を目指す関係各所に当社は協力するとともに、より高精度な水素用メーターを開発しました。 **＜意見交換＞** （為崎委員）いろいろな提案がある中で、先進的、先を行く取組だという印象を受けました。製作している機器やショールームは、社会貢献だけにとどまらず、子どもたちが未来を感じられるような内容で、そういった点において、ひと味違った活動でおもしろいと思いました。 （川村委員）消費者からすると見えにくい部分なので、そこをどうするのか、どのように一般の方へとつなげていくのかという点で、展示をされたり、海外で勉強したり、教育に取り組んだりとオールラウンドに行っている点がよいと思いました。 （北村委員）未来に関することという話が出ていました。電気自動車といっても、電気を作るのに石炭を燃やしているということは私もかねてから知っていたのですが、次のエネルギーとして水素が発展していくだろうという未来を見ながら子どもたちと学べるショールームを作っていることがおもしろいです。心配なのは、今後水素がどの程度普及していくのかという点ですが、そのような世の中になるとよいと思います。 （委員）**採点** **<u>生活協同組合ユーコープ</u>** **（応募者）プレゼンテーション** **＜質疑応答＞** （戸川委員長）社内 SNS はどれくらいの規模で行っているのですか。全員が見られるのですか。 （応募者）職員とパート職員を合わせて 7,000 人ほどです。個人のスマートフォンでも見ることができます。毎日５件ほどの事例が上がっていて、閲覧数はわかりませんが、統計的には職員の３～４割が見ているようです。 （石原委員）リサイクルセンターは、リサイクル施設としての視察の受入れを行っているのですか。 （応募者）随時見学を受け付けています。今年も組合員様から見学したいというご要望が何件かあり、受け入れて、リサイクルの流れについて一般啓発活動を行いました。今は大和市の教育委員会と連携して、小学生に見学に来てもらえるようアプローチをしています。毎日のように誰かに来てもらえると嬉しいとセンター長も申しておりますので、ぜひお越しください。

	（為崎委員）フードドライブの常設ということですが、寄付する食料品を入れるものを設置して、自由に入れてもらうのでしょうか。 （応募者）ポストのようなものを設置して入れてもらっています。ご協力して頂けるよう工夫しながら進めています。 （為崎委員）匿名での寄付となると、入れられた食品の安全性はどのように確保しているのですか。 （応募者）賞味期限が２か月あるかどうか確認し、フードバンクでも再チェックするようにしています。 （鈴木委員）なるべく多くの組合員さんにフードドライブに参加してもらうために、どのような働きかけをしているのですか。 （応募者）基本的には現場である店舗が中心となり、店内放送や、ポスターをわかりやすい場所に掲示するだけでなく、いただいた方のありがとうの声を掲載しながらご協力を呼びかけています。 （鈴木委員）私はコミュニティカフェで地域食堂、子ども食堂を行っています。フードドライブ便はありがたいのですが、取りに行くことや、配送が大変だなと感じています。そこまで踏み込んだ活動はありますか。 （応募者）私たちは基本的にフードバンクに食品を提供するまでの活動を行っています。中には宅配センターの近隣にある子ども食堂にキャンセル品を直接とりに来ていただく形式で提供しているものもありますが、遠方については、なかなか行き渡らないので、フードバンクから提供していただいています。 （川村委員）フードドライブはよく聞こえてくる活動で、いろいろなところが進めようとしていますが、貴社だからこそできる活動としてアピールできることはありますか。 （応募者）フードドライブに関しては組合活動で広めており、フードバンクの仕分けのお手伝いを体験してもらうことなどを通じて、組合員同士のネットワークにおいて口コミで共感の輪が広がっていくことが強みです。 （北村委員）フードドライブで賞味期限がもっと短いものも扱っていけるとよりよいと思いますが、そういった予定はありますか。 （応募者）食品衛生の問題があるのでそこまで踏み込めていませんが、今後の検討課題だと思っています。 **＜意見交換＞** （戸川委員長）今回はフードドライブ、フードバンクなど食品ロスの問題についてフィーチャーしていて、前回の応募内容との差がわかりやすかったです。 （為崎委員）生協の上部でフードバンク全体の仕組みを作り、各店舗では寄付品の受付を行う形をとることで、食料品が必要なところに確実に届いており、安定的に活動できています。先ほど鈴木委員が言及したように、立ち上げてもなかなか配送が追い付かないこともあると思いますが、そこを全体的にうまく作っています。また、組合員の口コミなども活用されていて、全体としてうまく回る仕組みを作っていると思いました。 （北村委員）ユーコープさんが頑張って取り組んでいるにもかかわらず、サービス

	が当たり前のように受け取られてしまっているように感じるので、より無理なく持続できる仕組みになればもっと良くなると思いました。フードロスは大事な問題なので、他のスーパーとの提携など、もっと広がりが生まれてくるとよいと思います。 （委員）**採点** **(2)　市民の部** **<u>特定非営利活動法人　ぷらっと</u>** **（応募者）プレゼンテーション** **＜質疑応答＞** （為崎委員）生き物調査をされていますが、その調査結果は各年でデータ化して整理されているのでしょうか。 （応募者）矢部小学校のボランティア団体「わかぎの会」に管理していただいています。地域の方への広報誌に掲載するほか、こちらでデータ管理をしており、見たいという方や小学校などから要望があればいつでも対応できる状態にしています。 （為崎委員）要望があればとのことですが、積極的に生物多様性の大切さを訴えることに利用することはありますか。 （応募者）しています。結果をまとめて報告したり、「ぷらっとだより」でも報告していますが、全てを掲載することができないため、さらに興味を持った方にはいつでも提示できるようにしています。 （鈴木委員）公園の中に拠点ができて、そこから活動が広がるというのは私もやってみたい活動です。拠点ができたことで広がったことはありますか。また、拠点の維持は大変だと思いますが、いかがですか。 （応募者）地域の方々、町内会自治会の方々の協力も得られるようになりました。そういった方々がこちらの活動を発信してくださり、仲間が増えました。維持は大変ですが、協力してくださる方が増えたことで、これまで自分たちだけでやらなければいけなかった活動も、みんなで楽しくできるようになりました。 （戸川委員長）アリゲーターガーが捕獲されたとのことですが、そのときの掻い掘りはどのくらいの大きさですか。 （応募者）テレビ番組が入って、水を抜いて捕獲されました。アリゲーターガーを急に放置されて、どうするかという時にテレビ局から依頼があり、掻い掘りを行いました。 （戸川委員長）生物多様性という点で苦労されていることはありますか。 （応募者）外来種が多くなってきているため、それらを駆除しながら、在来のものを増やしていくことに取り組んでいます。しかし、掻い掘りのときに駆除した外来の鯉などが数か月後にはまた戻ってきており、誰かが入れているのだろうと思われます。外来種を置いていくことをやめるように掲示したり、SNS 等でお願いしていますが、どうしても減らないのが現状です。

	（川村委員）「ぷらっと」という名称は子どもにも覚えてもらいやすいと思いますが、由来はあるのですか。 （応募者）プラットフォームという言葉からとりました。皆さんから情報が来て、発信していくという意味をこめて「ぷらっと」としました。 （為崎委員）今後、拠点として環境意識を啓発していくためにやっていきたいことがあれば教えてください。 （応募者）皆さんにお越しいただくため、イベントを通じて人をたくさん増やしたいと思います。 **＜意見交換＞** （戸川委員長）アリゲーターガーの写真は印象的でした。 （北村委員）誰かが飼育していたものを飼い切れなくなって放してしまうのでしょう。まだまだ新しい外来種は増えており、駆除も一度では終わらないので、引き続き定期的に実施することが大事です。今後も継続してやっていただきたいのですが、そのためには若い人たちに入ってきてもらいたい、地域の子どもたちを育てながら継続していってほしいです。 （為崎委員）応募書類の中の、子どもたちが立てた「生き物を大切に」とか「持ち帰らないで」という看板の写真が印象的でした。そうした子どもたちが意識を持って起こしたアクションが大人への発信力になっており、拠点を持ちながらきめ細かな活動をされていると思いました。 （鈴木委員）私は「森の幼稚園」という足元の自然観察を行っています。小さいお子さんを連れた親御さんに好評です。親からは、「足元の自然で遊ぶ体験をしたことがなくて何をしたらよいかわからないから教えてほしい」とよく伺います。そういう拠点になっていったらよいなと思います。 （委員）**採点** **<u>NPO 法人　海の森・山の森事務局</u>** **（応募者）プレゼンテーション** **＜質疑応答＞** （北村委員）マイクロプラスチック問題という最新の問題に取り組んでいらっしゃいますが、どのようなきっかけがあったのですか。 （応募者）15 年前、私は水中カメラマンとして海外を回っていました。当時、オーストラリア、ニュージーランドではすでにプラスチックごみが問題になっており、日本でも今後大変になるはずだから注目しておくようにと言われていました。そこから、自身でもプラスチックごみを見つけると撮影し、写真展で綺麗な海や生き物の写真と一緒に展示していました。しかし、なかなか日本では注目されず、３年ほど前にマイクロプラスチック、海洋プラスチックが社会問題となり、茅ケ崎のあたりの浜へ行くとプラスチックごみをよく目にしたので、子どもたちにも現場を見せて、触らせて、一緒に考えて解決していけたらとい

	う思いから取組が始まりました。 （為崎委員）いろいろなところとネットワークを組んでいらっしゃいますが、企業とどうつながって、今後のアクションとしてどのようなことを考えているのでしょうか。 （応募者）持続可能という観点から、私たちの活動が助成金頼みの活動になっていることを懸念しています。今朝の朝日新聞のイオンさんの広告に当団体の名前が掲載されていましたとおり、現状、企業からの助成金は申請するとすべて承認されています。しかし、助成金に依存せずに活動ができるよう、企業と協働しながら、企業から資金を得たいと考えています。ちょうど「パタゴニア」のアメリカ本社に英文申請書を提出し、承認されましたが、パタゴニアでは、資金援助もするけれども、社員と一緒にやっていこうというやり方をしてくださっています。そうした日本支社がある海外企業などと一緒に活動し、資金援助を得ていくことで、持続可能になると考えています。 （川村委員）環境教育は非常に大事で、新しい世代が新しい感覚を身に着けるという意味でとてもよいことだと思います。環境教育を行っていて、行動を起こすためにどうしたらよいのかというエッセンスはありますか。 （応募者）私たちは大人目線で授業するのではなく、子どもたちと同じ目線で、一緒になって問題を発見し、どう解決していくのか、ということに一年間取り組んでいくというやり方をしています。だから、子どもたちが生き生きとしており、普通はごみというと臭くて嫌だという子どもたちが多い中、一緒にやろうという気持ちで広がって、ごみをどんどん拾っています。拾ったごみは分別し、見える化して数値化し、そのデータを子どもたちの中で使ってもらう、私たちもいろいろなところでその数字を出すことで、どんどん興味を持ってくれています。その結果、37 人中８人の子どもが、将来、環境活動に関わる仕事がしたいと言ってくれています。 **＜意見交換＞** （為崎委員）子どもたちの自発性を引き出して動き出させ、それを企業が真剣に受け止めてくださる、そのつなぎ役をしている点がモデル的ですばらしいと思いました。 （北村委員）平成 25 年度に実践賞を受賞されていて、前回受賞団体の審査は難しいものですが、今回はパワーアップされていたのが伝わってきて非常によかったです。企業との持続可能な取組はみんなが目指しながらもなかなかできないことですが、こちらの団体はできそうで期待しています。 （川村委員）環境問題に関してローカルなことに取り組みながら、グローバルにもつながっている、また、子どもたちに対し、日常的なことを解決しながら、身近な活動が人類の未来にどう関わるのかを体験として教えているのは非常によかったです。 （戸川委員長）インプットは同じはずですが、アウトプットとアウトカムがどんどん広がっているということが今日のプレゼンでよくわかり、可能性を感じました。

	（委員）**採点** **<u>荏子田太陽公園愛護会</u>** **（応募者）プレゼンテーション** **＜質疑応答＞** （為崎委員）とてもきれいな公園、拠点を作り、人が集まる場所となっているのがすばらしいと思います。公園を拠点として、集う人たちに対し環境に関する働きかけを行っていることなどありましたら教えてください。 （応募者）元々はバラが専門でしたが、昨年から女性スタッフが中心となり、他の種類の植物もたくさん植えました。これからもバラに限らず各種の植物を植えて綺麗な公園としていきたいと考えています。 （川村委員）公園に来た方たちがそれを見て、自然環境が大切だと思ったとか、それを見て何か行動を起こしたといったエピソードはありますか。 （応募者）お越しいただくと、太陽ローズハウスのロケーションが良く、太陽公園はこんなに綺麗だったのかと認識していただけるという効果がありました。 （川村委員）活動開始されたのは平成 13 年からで、長い時間をかけ丹精こめて作られていると思いますが、太陽ローズハウスを使った今後の環境活動の展開は考えておられますか。 （応募者）近くに荏子田公園があり、５年前から水仙公園として着手しています。付近には５つの公園がありますので、太陽ローズハウスを拠点として、３つ目の公園に何か植えようと検討しています。 （川村委員）ネットワークということですか。 （応募者）はい。 （戸川委員長）太陽ローズハウスというすばらしいものができましたが、建屋があると管理、費用面での問題も出てくると思いますがいかがでしょうか。 （応募者）荏子田自治会が全面的にバックアップしてくれています。電気代、水道代も自治会の規約に盛り込み、支出していただいています。このように町内会と一緒にやっているので、荏子田第二自治会館としても位置付けています。 （為崎委員）公園を綺麗にすることのその先について、花を植えるなどして綺麗にしたことを通じて今後伝えたいことや実現したいことなど、長い目で見たときの目指す方向、いわゆるビジョンはありますか。 （応募者）荏子田地区は 65 歳以上の高齢者が 15%を占めるのですが、そのうち、10%くらいしか出てきておらず、交流を図る拠点としていきたいと考えています。 （為崎委員）拠点として綺麗な花があることが交流を図る重要な手段であるということでしょうか。 （応募者）そうです。太陽公園に来ればバラや桜など、季節の花が見られます。 （為崎委員）出てきた人が皆さんの仲間として活動に加わるという道筋なども考えているのでしょうか。

	（応募者）地区には 2,000 世帯あり、毎月「荏子田通信」を発行して配布しています。その中に太陽公園ニュースという欄を設け、それを見た人が参加してくれることがあります。 **＜意見交換＞** （川村委員）長年にわたる活動で成果が上がっていて、非常に頑張っていると思います。 （為崎委員）おそらく目指しているのは地域のコミュニティ作りで、その手段として綺麗な花を植える、環境整備があるということをどう評価するのかがとても難しいと思いました。コミュニティ作りは、今とても求められていることで、大切だとは思いますが、環境活動賞という中で手段になっているものをどう評価するか難しいと感じています。 （北村委員）現状はまだ花を育てているところで、今後、一緒に花を植える人が出てくるなど別の新しい環境活動に広がりが出てくるともっとよくなると思います。おそらくバラにこだわりがあるのだと思いますが、それ以外の次の取組が出てくるとおもしろいなと思います。 （吉井委員）自治会と一緒に活動している点は嬉しいなと思います。 （委員）**採点** **<u>大岡川夢ロードデッキサポーターズ</u>** **（応募者）プレゼンテーション** **＜質疑応答＞** （北村委員）清掃活動以外に、見つけた生き物のレポート発信など、環境活動としてやっていること、これからやっていこうとしていることがあれば教えてください。 （応募者）定例清掃は単なる清掃ではなく、水辺に下りて水面に触れ、貝や魚を網ですくうということをしています。また、地域のグループと協働で、子どもたちを招いてＥボートで桜桟橋から出発する環境勉強会などを実施しています。今までは少ない人数での実施でしたので、今後は行政などとも連携して人数が増えたらいいなと思っています。 （吉井委員）正規の会員が 10 名程度とのことですが、定例清掃には何人くらいの方が参加しているのですか。 （応募者）毎月第３日曜日に開催するという告知を Facebook 等で発信しています。会員以外の方も含め、20 名ほどが参加しています。最近だと YSCC というサッカージュニアチームの 30 名ほどの子どもたちとリーダー、保護者が参加し、活動しました。 （石原委員）収支報告に、収入・支出特になしと記載がありますが、今後、活動費というのはどのように捻出していく予定ですか。 （応募者）正式な会として発足したばかりですのでこれからの課題ですが、掃除用

	具は既存のものを利用し、水辺での活動については参加者から備品管理料を集めようかと考えています。 （為崎委員）水辺を介したコミュニティ作りから環境を自分事としてとらえるとのことでしたが、今までの活動を通じて、自分事としてとらえるようになった人がいたというエピソードあれば教えてください。 （応募者）周辺住民は、毎日見渡す大岡川にプラスチックごみなどがたくさん浮いている状況を目にしています。今までは子どもたちから保護者まで、意識改革を促す場面を提供する機会がありませんでした。世の中の話題となっており、また、横浜市が新市庁舎への移転を控えているということもありますので、横浜市とも一緒にできたらと考えています。 （為崎委員）今のところ意識変革までで、アクションにはまだつながっていないのでしょうか。 （応募者）ごみ拾いに参加してくれたり、水の透明度が高いと底にいる生き物が見えるので、「こんな生き物がいたのか」と子どもたちは驚いたりしているようです。 **＜意見交換＞** （為崎委員）応募書類からは水辺のまちづくりのような活動という印象を受けましたが、質疑応答を通じて、生き物の観察や意識の変革というところにも取り組んでいることがわかりました。水辺のまちづくりだけでなく、しっかりと環境に結び付けた活動もされているという印象を受けました。 （川村委員）清掃活動が主体で、今後、官民連携というところも検討されているようですが、この団体にとって水辺アクティビティ体験はとても大事なことで、いかに環境について考えさせるのかをもう少し掘り下げて、さらには発信できるようになってくるとよいと思いました。 （北村委員）定期的、継続的に活動されていてすばらしいと思いますが、まだ活動年数が浅いので、今後、活動をよりよくするためにいろいろなところと協力体制ができるともっとよいと思います。例えば、水辺の鳥のリストを拝見しましたが、私が行けば鳥の種類を倍くらいに増やせるのではないかと思いました。これからいろいろ考えていっていただけたらと思います。 （委員）**採点** **<u>上星川グリーンアッププロジェクト</u>** **（応募者）プレゼンテーション** **＜質疑応答＞** （鈴木委員）ハンギングバスケットをやっている団体は多いと思いますが、ずっと続けていくのは大変だと思います。育苗のやり方など、今取り組んでいる内容について情報発信はされていますか。 （応募者）情報発信は現状できていません。今ご指摘があったように、SNS で発信

	し他区から集めてみるのもおもしろいかと思いました。ありがとうございます。 （為崎委員）街を花で満たすということが団体の最終目標でしょうか、それとも花で満たした後に何か目指すものがありますか。 （応募者）花を通してコミュニケーションアップを図っています。町の人たちは小学校の同級生だった、近所のお店の人だったということがありますが、実際にはお互いのことをよく知らなかったようです。花をきっかけに近隣の人と話をしたり、散歩をしている方が「お花が増えたね」と言ってくれたりすることがあります。 （為崎委員）そういった会話の中から、「自然を大切にしよう」という話が生まれるなど、単なるコミュニケーションだけではなく、環境意識が変わったということはありますか。 （応募者）あります。種から育てるのは大変ですが、コキアの種が自然に落ちて夏に緑になり、赤くなって、箒になって、それを使うというサイクルになっていると、「緑を大切にしよう。」「昔、箒草ってあったよね。」という会話が生まれてきます。 （川村委員）自分の家で飾るものを町のものにするという発想は非常におもしろいです。３町内会で賛同を集めるとどれくらい、何割くらいを占めているのですか。 （応募者）町内会をベースにしているわけではなく、地域の中で 1.5～2km くらいの上星川駅から東川島町までのエリアが３町内会をまたいでいる状況です。 （川村委員）そうすると、何軒かあると参加率は高いという判断でよろしいですか。 （応募者）そうですね。一部の町内会が抜けていますが、私が引っ越して来た際、町内会がわからず、自宅の周囲と上星川を結ぶという感覚でいたところ、気づいたら３町内会になっていました。 （戸川委員長）自己責任で活動するというのは、新しいシェアの形なのかなと思います。自分の投資した分は責任を持って育てて、みんなに見てもらうということですよね。コミュニティの中での新しく始まったことや、参加しているメンバーの中で何か新しい動きはありますか。または今後やりたいことなどあれば教えてください。 （応募者）子どもたちにもつなげていきたいという思いがあります。箒作りなどは 10 月の末、ハロウィンの頃なので新しい世代につなげていけたらと考えています。 **＜意見交換＞** （戸川委員長）箒作りは楽しそうでよいですね。 （北村委員）お二人で始めたことが広がっていくのがわかり、パワフルでとてもよい活動だなと思います。小さなことから始められるよい事例となっていると思います。活動はまだ始まったばかりですので、今後どういうところとつながっていくのか、また、サカタのタネさんとコラボレーションしているので、どんどん進めて、更につなげたいという人たちが出てくるとよいと思います。また、今年のキーワードとして、コミュニティ作りということをどこの団体もおっし

	やっているので、先ほどの為崎委員の発言のように、コミュニティ作りと環境をどのように審査するのかが少し難しいですね。 （為崎委員）５年間ずっと花をずっと絶やさないというのはすごいことだと思いますが、北村委員がおっしゃったように、継続していく仕組みとして確立することについては、まだ発展途上という気がしています。委員長がおっしゃったように、それぞれが費用を出して自己責任で活動するという持続できる仕組みが確立できたら、他のモデルになると思います。 （吉井委員）このくらいゆっくり活動する方がちょうどよい感じがします。自己責任、自分からシェアしていくことで、段々増えていくというのが素敵です。 （川村委員）道路に花があると、この地域はつながりがあるのかなと思えるので、このような団体の存在により、町やコミュニティが見える化するのだと思います。 （委員）**採点** **<u>グリーンバード横浜南チーム</u>** **（応募者）プレゼンテーション** **＜質疑応答＞** （為崎委員）ごみ拾いというシンプルな活動だからこそ、いろいろな方が入ってこられるので、非常によいと思います。障害のある方や引きこもりの方も参加されているようですが、そういう方々を受け入れるポイントなどありましたら教えてください。 （応募者）養護学校の先生がメンバーを呼んで来てくれるので、私が先頭を歩き、最後尾にサブリーダーとして養護学校の先生がついてくださいます。前と後ろからしっかり見守って活動しています。 （鈴木委員）子どもたちが多く参加されているということですが、活動の前後に子どもたちが具体的に考える機会や場はありますか。 （応募者）清掃活動後に皆で集まる時間を設けて、いろいろな活動について発表したり、考えたりする時間としています。 （戸川委員長）子どもたちの行動変容はありますか。また、毎回参加している方が多いのか教えていただけますか。 （応募者）舞田地区のキッズクラブの子どもと一緒に活動しており、子どもが子どもを呼んできてくれています。毎回新しい子どもが参加してくれます。 （委員長）繰り返し参加する子どもの行動変容はどうですか。 （応募者）なぜここにごみを捨てるのか、という疑問が毎回出てくるので、それに対しに一つひとつ答えています。例えば、排水溝に捨てられているごみは、捨ててはいけない場所に捨てていると大人もわかっていて、隠しながら捨てているのではと皆で考えたりしています。 （戸川委員長）Ｔシャツについてもう少し教えてください。 （応募者）Ｔシャツ１枚はペットボトル６本でできます。私自身 30～40 本必要なの

	かと思っていました。廃プラスチックの問題への対応を、Ｔシャツによって一つの形にできたと思います。サーキュラーな取組、拾ったものを別の物に転換する、拾ったものを考えて再提示するよい機会となっています。これからもこのような活動につなげていきたいと考えています。 （北村委員）拾ったペットボトルでも作ったのですか。 （応募者）次からとなります。１作目はストックしてもらっていたごみから作りました。今、私たちが拾っているものはストックしています。 （北村委員）それから作ることもできるのですか。 （応募者）はい。 （為崎委員）リサイクルで作ったＴシャツを使用して、次にそれを廃棄するときはどうするのですか。 （応募者）同じ会社に送って再度リサイクルすることができます。そういう循環モデルになっています。Ｔシャツは１作目ですが、それ以外のものも作れると思うので、ワークショップにおいて皆で考えていきたいです。まずは、参加者とサーキュラーな取組を一緒に考えていくための第一段としてＴシャツにしました。 （北村委員）ごみがもう一度物になっていくサーキュラーな取組とのことでとてもおもしろいのですが、実際に購入する場合の価格はどれくらいになりますか。 （応募者）第１作目なので、大分高くて、今は１着 7,000 円になります。100 枚しか作れなかったからということもあります。 （北村委員）高くても着ることで、皆の意識が変わっていくと思うので、うまく進むとよいなと思います。 （為崎委員）いろいろな方がごみ拾いに参加されていると、参加者の中で意識の温度差があると思いますが、差はあってもよいとお考えですか。それともどこか一定の方向に引っ張っていく必要があるとお考えですか。 （応募者）活動の終わりに集まる時間を設け、そのときに様々なアプローチをして、皆さんに問いかけています。参加者の中には全くごみを拾わずにおしゃべりしている方もいますが、ごみ拾いに関わっていると環境意識が少しずつ高まっていくと思うので、会話だけする人でも構わないと思いますし、今後もそのような取組にしていきたいと思っています。 **＜意見交換＞** （戸川委員長）ダイイチさんが行っている BRING の取組に近いですね。 （川村委員）上星川グリーンアッププロジェクトさんのように、お母さんと娘さんのようなコアとなる方々の推進力は財産だと思うので、そういう方がいるのは力になると思いました。 （石原委員）おもしろい取組です。河原さんは昨年度企業の部で大賞を受賞した太陽住建さんの社長で、会社でも障害者の方を受け入れられていて、今度はグリーンバードにおいて障害者の方も含め誰でも平等に参加できるようにするというのが、代表者の方の志としてすばらしいです。 （北村委員）若い力でぐっと推し進めているのがとてもよいと思いました。また、

	子どもが積極的に入ってきていることが、10年、20年と続いていくきっかけになると思うので、勢いが感じられ、期待できると思いました。若い人の発想が楽しいです。 （川村委員）助成金に頼るような流れもある中で、クラウドファンディングのような新しい資金集めの方法を小さなNPOがやっていくのは重要だと思いました。 （委員）**採点** **<u>一般社団法人 里海イニシアティブ</u>** **（応募者）プレゼンテーション** **＜質疑応答＞** （為崎委員）最終的に目指すところはどこなのかなと思いました。商品化で利益を得ていくのか、社会貢献的にノウハウを波及させていくのかを教えてください。 （応募者）まずはブルーカーボンの知名度を上げることです。生昆布は新しい食材で、これまでも乾燥昆布はありましたが、生の昆布を食べたことはないという方が多いと思います。単にしゃぶしゃぶで食べるのではなく、饅頭に入れたり、またフコイダンは肌によいとされていますので、化粧品やシャンプーに使うことができます。そのほか、布にも加工できます。開発する範囲は非常に広いので、将来は経済的に成り立つ形にし、一つの事業とすることを考えています。 （北村委員）このように作られた昆布は通常より価格は高いのですか。 （応募者）現在は高額です。生産量が少ないためですが、100 トンくらいまで生産しないと採算がとれないところがあります。それを食べてくださいというのは無理な話なので、今申し上げましたようにいろいろな物に活用していく、例えばプラスチックの代わりになる物です。また、アルギン酸は燃料にもなりますし、ジェットエンジンのジェット燃料にも利用しようという話も出ています。 （川村委員）昆布は北海道、東北でないと自生しないと思うのですが、温暖化が進んでいる中で、今後、日本全体でいろいろやればよいというご提案でした。どの辺りのことまでできるのでしょうか。 （応募者）北海道と東北はできるというのは、海水温が16～18度以下であるため、一年中とれるということです。こちらでは、夏場に海水温がそれ以上になるため、私たちが作るのは11月～３月のほんのわずか４～５か月の期間です。それでも、数ミリ単位の種が４～５ｍにまで成長し、たくさんの炭酸ガスを吸収してくれます。温暖化が大きなネックとなっていますので、暖かいところでもできるものを作ろうということもあります。また、いろいろな方が山で、里山と称して、ミネラルを含んだものをたくさん流してくれれば、海は豊かになります。そうすると魚も海藻も獲れるようになり、そういう意味で山を大事にしています。道志村さんや午前の部で発表した海の森・山の森事務局さんなどがいるから、私たちがいるのだと思います。だから私たちは食べることができ、魚が捕れるのです。 （鈴木委員）「ぶんこのこんぶ」はわかりやすく、先日、FaceBook で冷凍の「ぶん

	このこんぶ」の販売について掲載されていましたが、販売状況はどうですか。 （応募者）はけ過ぎており困るほどです。来月、浜上げしますが、もっといろいろなところで実施したいです。私たちは横浜市のご指導の下、マニュアル化と標準化をしました。どれくらいの作業でどれくらいの量が作れるのかという収穫量の目途が立ったので、引き続き、広げていきたいと思います。 **＜意見交換＞** （鈴木委員）先ほどの私の質問の意図ですが、昆布が冷凍庫にあるので取りに来てくださる方に販売をされていたようなのです。そうした情報発信があると今はすごい勢いで皆さん集まって取りに来て、持って帰るということが起こっているなと感じています。この間、舞岡公園の近くでネギがたくさん採れ過ぎたという発信があり、すぐに人が集まったということもありました。そういう動きが出てきているのがおもしろいと思います。 （戸川委員長）ブルーカーボンは横浜で立ち上がって、当初は横浜だけという感じでしたが、今では世界が注目しています。炭素を固定化するスピードがとても早く、それをどのように循環型にするのかが問われているところで、その先駆けとなっており、これだけ昆布にこだわっているのはすごいと思います。 （為崎委員）昆布だけかといった印象ではなく、昆布をここまで突き詰めているのかと感じます。ブルーカーボンという大元を忘れずに、昆布でできそうなことをひたすら探り、それが実現しそうなところは勢いがあってよいと思います。 （川村委員）水温 16～20 度以下にあれば全国的にできるとおっしゃっていましたが、温暖化も進んでおり、北限もあるのではないかと思いました。 （戸川委員長）だんだん短くなったり、難しいところもあるかもしれませんね。 （為崎委員）目の付け所はおもしろいと思いますが、全体の仕組みとして成り立っていくにはもう少し時間がかかるのではないかと感じます。今後の事業で、収益も得られるようになっていくことを期待しています。 （委員）**採点** **<u>ＮＰＯ法人　道志水源林ボランティアの会</u>** **（応募者）プレゼンテーション** **＜質疑応答＞** （為崎委員）応募用紙を拝見すると、毎年度同じことを着実に継続して実施していると感じました。今後も拡充はせずに、今のまま地道に継続されるのでしょうか。それとも、新たな展開をお考えですか。 （応募者）今の活動を継続していくことを主に考えています。10 年間にわたって間伐を行ってきましたが、道志村の民有林が 4,600 ヘクタールあるうちのまだ一部なので、引き続き実施していきたいと思います。 （為崎委員）今後安定的に継続していくためには若い人の呼び込みが必要ということを課題として挙げていますが、今まで呼びかけをされて、若い人が入ってき

	たという事例があれば教えてください。 （応募者）ホームページをご覧になった方から問合せをいただいて、体験として一度来ていただき、どういうことを行うのかを感じてもらってから入るという方が今年は結構いました。若い方といっても30～40代の方はなかなか来られないので、60代の方をターゲットとしています。 （川村委員）長い年月をかけて実施されていて、活動はとてもすばらしいのですが、高齢化で皆さんが培ったノウハウが若い世代に伝わっていないのかなということが残念です。ぜひ、大学生などに拡大していって、技術、ノウハウを次の世代に伝えていってほしいと思います。 （戸川委員長）例えば、大学とつながりたい場合、どうしたらよいのかご意見ありますか。 （北村委員）たいていの大学には環境系のサークルや山岳系のサークルがあります。環境活動を一緒にできないか学生に声をかけたいと大学の事務に相談したら、対応してもらえると思います。おもしろそうなので、私も学生連れて行ったら盛り上がるのではと考えていました。 （応募者）ぜひ、ご連絡いただきたいと思います。 （北村委員）参加者はすべて横浜の方ですか。 （応募者）横浜の人が多いですが、周辺の横須賀、町田、相模原、東京や川崎からも参加される方はいます。 （北村委員）水源を守ろうという意義は、都度、説明されながら実施されているのですか。 （応募者）そうですね。我々の活動に賛同していただける方でしたら横浜市民でなくても参加可能です。 （為崎委員）事前の質問で、道志村との連携はありますかとの問いに「連携はない」とご回答いただいていますが、連携の必要性は感じられませんか。現地とつながることで充実する部分があったり、活動が広がったりすることもあるかと思うのですが、その点どのようにお考えですか。 （応募者）道志村ともいろいろやっていきたいとは思っているのですが、私たちのパワーが不足しており、そこまでできていません。道の駅などのイベントには毎年参加し、つながりを持とうとはしています。 （為崎委員）もしマンパワーがあれば、どのようなつながりを持ちたいとお考えですか。 （応募者）皆さんが山のことをどう考えているのかを知りたいと思います。 **＜意見交換＞** （為崎委員）長い間地道に取り組まれていることを評価したいと思います。お話をお聞きしながら、このような活動に発展を求めるべきなのかということも考えました。同じことを継続することの価値もあり、私は仕事柄どうしても先に行くとか発展ということを求めてしまいますが、それがどうなのかと思いました。 （川村委員）先ほど質問で伺ったのですが、60、70代の方がほとんどで、この活動を持続する必要があるにもかかわらず、そういう体制に持っていかなくてはな

	らない課題があると思いますので、ここで私たちがプッシュし肩入れするのも重要なのかなと思いました。 （北村委員）出前授業で小学校へ行くというのもおもしろいですが、逆に連れて来る機会があるともっとおもしろくなると思います。小中学生には危険なので切らせないとおっしゃっていましたが、現場を見てもらうのは大事ですので、見に行ってここが水源であるということを知るという学習の仕方もあると思います。 （鈴木委員）私は一時期、北海道の山の中で子どもたちと活動をしていましたが、とてもニーズがあり、森の中で遊ぶという体験は貴重なので、ぜひそういうことにつながるとよいと思いました。 （委員）**採点** **<u>とつかエココーディネーター協議会</u>** **（応募者）プレゼンテーション** **＜質疑応答＞** （北村委員）いろいろなことをされていますが、一番核になる活動はどれですか。 （応募者）今まではキャラバンエコ講座でした。資源循環局や建築局と一緒に講座を実施してきました。今年度から来年度にかけてはSDGsを中心に活動を行う予定です。 （北村委員）時代の流れに合わせていろいろと変えていき、SDGsを知ってもらおうというのがこれからの活動ですね。 （応募者）SDGsに取り組む段階ですが、リーダーになる方を養成するということをやっています。 （為崎委員）元々は区の講座に集まられていて、区主導だったのかと思いますが、今はかなり自立しておられるようです。そのように行政主導で始まった所から自立するポイントがありましたら教えてください。 （応募者）元々、自主事業と区との協働事業にわけて年間計画を立てており、区と実施する場合には区が関わってくれるのでそれほど力を割かずとも実施できます。自主事業につきましては、会員の方が参加できるよう必ず呼び掛けしています。参加するうちに、環境にあまり興味がなかった方も段々興味を示すようになってきて、それが力になって進んでいます。 （為崎委員）今後活動を続けていくために、安定的な財政基盤の確保についての見通しはどのようにお考えですか。 （応募者）今までの３年間は丸々区の補助を受けていました。そのほか一部は区から助成金を受けていますが、助成金だけでは難しいので、今後は会員の方や地域企業へ賛助会費をお願いしながら、財政の基盤を作っていきたいと考えています。 （応募者）また、講座を実施するときに参加者に参加費をお願いしたり、地産地消の野菜等を販売したりするなど、多方面に考えています。

	（鈴木委員）シニア活躍の場を作っていると思いました。例えば企業の中で環境の部門を経験した方が集まっているということはありますか。 （応募者）そういう方はいませんが、９人が神奈川県知事の委嘱で神奈川県地球温暖化防止活動推進員をしています。横浜で１か月に１回会議があり、参加した際に知識を得ています。 （戸川委員長）エココーディネーターからなぜ SDGs になったのかについて、もう一度詳しく教えてください。 （応募者）横浜市が SDGs 未来都市になり、区でも SDGs を進めていきたいという意向がありましたので、一緒に活動しようということで、比較的自由に動ける私たちが先頭に立って実施していくことになりました。 **＜意見交換＞** （為崎委員）SDGs への移行というのは私も気になっていて、先ほど、これから予定している講座をお聞きし、しっかり組み立てられていると思いました。皆そっちの方へ向かっているので、エコから SDGs に移行するプロセスのモデル的な存在になっていただくと、後進の団体が追いやすいと思いました。 （戸川委員長）私が先ほど質問したのは、環境活動賞の次のステップが問われるような動きだと思ったからです。SDGs を意識する応募者がこれから増えていくだろうことにどう対応していくかが問われていて、コーディネーターということをキーワードにすると、エコだけでは足りない状況だということがひしひしと伝わってくる活動だなと思います。 （北村委員）おっしゃるとおりです。世の中が変わっていくにつれて、環境に対する皆さんの意識や焦点が変わっていくので、柔軟に変えていけるのはすばらしいと思いました。SDGs はこういうことだという参考事例を作っていただけると、他の団体もまねしやすくなるので、そうして発展していくとよいと思いました。 （戸川委員長）企業にはありますが、市民レベルでのコーディネーター勉強会というのはあまり聞いたことがありません。SDGs のうちの一部だけというのはあると思いますが、全般的にというのはなかなか聞かないので、個人的にはおもしろそうだと感じました。横浜環境活動賞審査委委員会に対しても何かのメッセージをいただいたようでした。 （委員）**採点** **<u>なか区民クラブ：バラ教室部会</u>** **（応募者）プレゼンテーション** **＜質疑応答＞** （為崎委員）皆さんの目指す取組がバラを見た方に伝わる形になっているのでしょうか。単に美しいバラと感じるだけでなく、無農薬を目指して実験中であることが見た人にわかる形になっていますか。 （応募者）タウンニュースの取材に応じて、私たちが無農薬栽培に取り組んでいる

	ことをアピールし、多くの方に知ってもらう努力は微力ながら進めています。 （為崎委員）バラが咲いている場所そのものでわかる形になっていますか。 （応募者）掲示板でバラの無農薬栽培を行っていること、また興味がある方への参加を呼び掛けることを行っています。 （為崎委員）掲示を見た方の反応はいかがですか。 （応募者）まだ反応はありません。 （為崎委員）ぜひその価値を伝えて共感する人を掘り起こしていただければと思います。 （応募者）横浜市に取組を理解してもらい、公共的な場所で栽培を広げていくことが大事だと思います。 （北村委員）中区民クラブの中のバラ教室部会ということですが、他の部会で環境に関する活動をしているところはありますか。 （応募者）ほかの部会は関係ありません。今、環境に関する活動は最近はストップしています。 （北村委員）今後もバラを追究していこうというお考えでしょうか。または、農薬の問題はバラに限らないという点で、何か考えていらっしゃいますか。 （応募者）今のところはバラを考えています。横浜市の花であり、ガーデンネックレスの取組でも花を広めていこうとしている中、バラは花の女王ですし、バラを広めることの手段として、無農薬栽培を全面に押し出し、人に優しい環境にしていこうと思っています。 （応募者）私はバラ栽培に取り組んで 25 年です。横浜ばら会の理事長をしています。会を通じても無農薬の普及は非常に難しいと思います。私が 25 年培ってきた知識を全部つぎ込んで、バラの無農薬化を実現したいと思っています。市の花はバラですので、横浜市の花を無農薬で作るということをぜひとも実現し、市民の方に浸透させていきたいというのが私の願いです。 （川村委員）私もバラを作っていますので、難しいことはよくわります。大変なことに取り組んでおられると思います。ぜひ広めていってほしいと思いますが、その戦略があれば教えてください。 （応募者）元町百段公園で様々な実験をしていて、一つひとつを実りあるものにして、マニュアル化していきたいと思っています。一番怖いのはバラゾウムシです。春になって芽が出ると食べられてしまい花が咲きません。バラゾウムシへの対策は水噴射です。昔からの手法ですが、今は水道水でやっていますので、みなとのみえる丘公園など大きな公園でも適用できます。これをぜひ実現したいです。 **＜意見交換＞** （為崎委員）大変だとおっしゃっていましたが、とても挑戦的な取組です。ただし応募資料にも実験段階と記載があり、まだ確立されていない段階をどう評価するのかがとても難しいと思いました。順調に進んでいるとのお話でしたが、最終結果がどうなるのか定かでないため、テーマはすばらしいですが、評価が難しいです。

	（川村委員）15 名の会員がどのような年齢構成かはわかりませんが、少なくとも本日ご登壇いただいた方々は年齢を重ねてこのような活動を展開しています。活動年数はまだ４年目ですが、環境のため、世間のために挑戦することができるということを証明している点は評価できると思います。 （委員）**採点** **<u>美里橋サークル</u>** **（応募者）プレゼンテーション** **＜質疑応答＞** （為崎委員）準工業地域ということで、事業所の多いエリアなので元々は準工地域を守る会が事業者の中で作られているようですが、そういった団体との方針のすり合わせや共感を得るのに苦労された点もあるかと思います。事業者を味方につけていくポイントなどあれば教えてください。 （応募者）私は平成 26 年、27 年に東山田四丁目町内会の会長を務めていました。その際、町内会の一部である準工地域を守る会の総会に出て、幹部の方々とどんな問題があるのか、今後どうすべきかをフランクに話す状況に恵まれました。ストレートに意見を言いながら前進するような機会を得ることができたことが大きいと思います。 （為崎委員）伺っていますと、準工地域を守る会の側も柔軟に受け入れてくださったようですね。 （応募者）そうですね。幹部の方々が非常に柔軟に対応してくださいました。余談ですが、準工業地域は工場があり、火が出て危ないところです。機器も多くあり、フォークリフト、什器、ＡＥＤ、発電機などもありましたので、被災状況が大きい場合には応援に行くという協定も結んでいただいていました。 （北村委員）地域みどりのまちづくり事業として助成を受けられていますが、終わった後もずっと維持する必要があるかと思います。お金が切れてしまうと続けていくことは大変だと思いますが、何か工夫をされていますか。 （応募者）継続には資金が必要なため、エリア内に５か所、野菜の無人販売所を設置しました。昨年の売上げは 23 万５千円の利益となり、チューリップ７千株を 10 万円ほどで購入するなどしました。 （北村委員）野菜はどこで入手したのですか。 （応募者）知り合いの農家３軒から入手しました。100 円で売れるものを 70 円で入手し、30 円の利益を得ています。 （戸川委員長）準工業地域において、工場、企業の方とのタイアップなど非常に密接に関わってくるかと思いますが、何か補足することがあれば教えてください。 （応募者）私たちのサークルの活動によって、町内会の環境改善と景観向上は達成できました。今度は準工業地域内が殺風景ですので、親しみの持てるようにするため、大型の 1.6m長さ、30～40ｃｍ幅のプランターを 27 基設置し、まずは美観を良くし、よいなと実感してもらって共感してもらい、緑のリーダーの一

	部を補強してもらうという取組を進めつつあります。 （為崎委員）企業から活動に参加してくださる方は出てきていますか。 （応募者）今は資金面で年間 10 万円強のサポートをしていただいています。これから、私たちの活動を気に入って参加してくださる方がいるとよいなと思っています。 **＜意見交換＞** （為崎委員）企業とこのような活動団体は目指す方向が違う場合もあり、なかなか調整は難しいと思います。おそらく「一緒によい地域にしたい」という思いが同じだったのでしょう。立場が違っても同じ方向を向いていることがお話から伺えて、とてもよい地域だと思いました。 （戸川委員長）私の知る限りでは、この準工業地域は元々工業団地でしたが、新しく生活の囲いができました。その際、工業団地の方もどうやって共生していこうかと考えられて、いろいろな取組、例えば先ほどお話に出た防災の取組など行っておられ、新しい暮らしの中の共生になっていくのだろうと思います。地域は行政区域で区切られていますが、そこに住まわれている方、携わられている方には垣根があるわけではないので、どう共生していくのかは大命題だと思います。その中でおもしろい新鮮な取組だと感じました。 （委員）**採点** **<u>みどりと水を守り育てる「地域環境向上委員会」</u>** **（応募者）プレゼンテーション** **＜質疑応答＞** （為崎委員）水辺の活動についてご説明いただきましたが、応募書類には花、緑に関する活動について記載されています。団体として水辺の活動をしている方と緑の活動をしている方の大きく２グループあるのでしょうか。 （応募者）合体しました。私が水辺の会を行っていて、皆さんに呼び掛けて、町内会の方３名を含めてまちづくりを始めました。川から始まり、町の美化、環境問題に移ったという状況です。 （為崎委員）応募書類に書かれた内容と説明の内容が異なっている点について教えていただけますか。 （応募者）応募書類を提出後、質問が来まして、その点について記載し提出しています。本日、プレゼン用資料を持参していますが、配布は不可とのことでしたのでお渡しできませんでした。 （戸川委員長）事前質問の回答は受け取っています。応募用紙よりももっと長い期間で活動されているのですよね。この名称になってから３年間活動されているということですね。 （応募者）はい。 （吉井委員）拝見すると川においては 10 年前から活動していらっしゃるということ

	ですが、川は随分きれいになりましたか。 （応募者）はい。きれいになりました。 （吉井委員）町内会と一緒に活動されているとのことで、私たち町内会としては非常に嬉しいです。ありがとうございます。これからも頑張ってください。 （戸川委員長）具体的にポイ捨てが減少してきたといった目に見てわかるような成果がありましたか。 （応募者）子どもたちが清掃に何回か参加してくれました。細かくデータをとってくれて、着実にごみが少なくなったこと、捨ててある物が変わってきたことなどがわかり、学校のイベントで研究発表をしてくれました。花を植えることで、ごみのポイ捨てをする人が少なくなったというのが現実です。 （応募者）私たちはごみの集積所をきちんと整備するという活動も行っていて、整備後はごみのポイ捨てが少なくなります。カラスネットボックスを設置したりして、そこに捨てるようになっています。 （北村委員）最初は川から始まって町の緑化を手掛け、町の緑化が川にもプラスになっているという理解でよろしいですか。 （応募者）はい、現在はそうです。町内会、また、地元の小学校、中学校ぐるみで絵看板を設置してもらっています。単にごみを捨ててはいけないというものでなく、きれいな川の姿は自分たちの宝であるという、子どもたちの思いを掲げてあります。川を中心に始まったことですが、皆さんが協力し、また、喜んでくださっています。 （北村委員）川のことがあまり書かれていなかったので、ぜひお伺いしたいのですが、実際に川に生き物が戻ってきたとか、そういった調査はされていますか。 （応募者）戻ってきました。ヘドロの川でしたが、こつこつと掃除をすることで水がきれいになり、また、私たちの町も下水処理設備が完備されました。ごみはあるとしても透明なきれいな水が流れるようになりました。NPO 法人鶴見川ネットワーキングさんに生物調査を実施していただいたところ、ほとんど魚がいませんでしたが、今では 10 数種類の魚が集まってきたことがわかりました。地元の住民も驚いています。毎年５月３日に魚採りしています。とても楽しい活動になっています。 **＜意見交換＞** （川村委員）話を聞くとどんどん膨らんできますね。応募書類に書かれているのは平成 29 年からですが、清掃活動を平成 15 年から始められいて、段々広がっていく様子がうかがえました。コアになるメンバーが 15 年近く活動されているのですね。 （戸川委員長）20 数年前にあの辺りにいたことがあるのですが、この間しばらくぶりに通ったところ、とてもきれいになったなと思っていました。今回、応募書類を拝見して、こちらの方々が活動されていたことがわかり、すばらしいなと感じています。普通の用水路のようなところでしたが、今はきれいに整備されています。

	（委員）**採点** **(3)　児童・生徒・学生の部** **<u>横浜市立金沢小学校</u>** **（応募者）プレゼンテーション** **＜質疑応答＞** （北村委員）立地を生かしてアマモに着目したというのはおもしろい活動だと思います。応募用紙の「活動の目標・ねらいに対する成果」のところに、「児童主体で学習できるよう単元を構成した」とありますが、具体的にどのように児童を主体としているのでしょうか。 （応募者）学校という組織の特徴上、教員が代わるので、形やつながりが残っていても、それが形骸化してしまうところがあります。もう一度子どもたちに「この行事についてどう思うか」ということを尋ね、子どもたちに返していきながら、その年の子どもたちの意識、思いや願いを生かして活動を広げていきたいと考えています。 （北村委員）学習の際に自主的になるだけでなく、子どもたちの活動も自主的になっていくとよいかと思います。取組の中で、子どもたちが発案した新しいことはありますか。 （応募者）アマモとアサリのどちらが海をきれいにするのか、子どもの方から実験をしてみたいと申し出があり、実際に実験してみたことがあります。 （川村委員）応募用紙に活動開始が平成 12 年と書かれていますが、アマモの取組はいつから始めたのでしょうか。 （応募者）平成 12 年は総合的な学習の始まりで、海の公園に関わることからでした。その５年後くらいからアマモは本格的に始まりました。今、16 年ほどになります。 （鈴木委員）児童主体であると今年の子どもたちはこういうことに興味があるけれど、去年の子どもはそうでもなかったといった波があるのか、それとも積み重ねで去年やっていることを今年も引き継いでいくのか、そのあたりどんな風に組み立てていらっしゃいますか。 （応募者）同じアマモでも、アマモの周辺の生き物に興味がある年と、海がどのようにきれいになっていくのかということに焦点を当てる年があります。材としては同じアマモですが、ねらうところを少しずつ変えていき、子どもたちに寄り添うように進めています。 （為崎委員）アマモに取り組んでいる４年生は非常に環境に密接した活動だと思いますが、全学年でマリンフェスタに行っていて、潮干狩りなども入ってくると楽しいイベントで終わってしまわないかと思ってしまいます。そこを必ず環境活動に結びつけて参加させるという工夫をされていたら教えてください。 （応募者）１、２年生は楽しいから始まって、３年生ぐらいからは最初は楽しいから始まるけれども、「ごみはどうか」と教員の方で少し視点を置いています。マリンフェスタが楽しいだけではなく、それを併せてマリンフェスタで見てみよ

	うという視点を作るようにしています。 （為崎委員）４年生でアマモの活動に取り組むと、その後５年生、６年生になってマリンフェスタに行ったときの行動が違ってくるのでしょうか。 （応募者）海の公園ではアマモが生えている場所が割と集中しているので、アサリを欲しい子たちはそこを狙って行ったり、コシマガリモエビなどの他の生き物を観察したりしているところは学習が深まっていると思います。 （戸川委員長）応募書類に２月 18 日に自治会との懇話会予定とありますが、どんなことがあったか教えてください。 （応募者）地域の方々に向けて４年生が発表しました。皆さん、地元で長く関わってくださる方なのですが、改めてアマモはそういうことだったのかと大変ご好評いただき、子どもたちにとってもとてもありがたいことでした。 （川村委員）アマモ再生会議とのやりとりはどのように始まったのですか。 （応募者）アマモにとても興味がある先生がいて、海の公園と関わることで、アマモ再生会議の方とつながってやりとりが始まったと聞いています。 **＜意見交換＞** （為崎委員）立地特性を生かして、海との触れ合いの中でうまく環境活動を取り入れていると思いました。４年生でアマモに取り組むことで意識が変わってくると聞いて、４年生は節目を迎える年なのかなと感じました。 （川村委員）応募書類からはアマモを海に戻す活動を長年やってらっしゃるというところが見えにくかったので、そこをもう一度、加味して評価したいと思います。 （鈴木委員）金沢小学校さんは海が近いので海を題材にしてというのはあると思いますが、どんな小学校でも何かフィールドがあると思います。そのフィールドに必ず子どもたちをつなげるという広がりが、これがモデルになって生まれていくとよいなと思いました。 （委員）**採点** **<u>横浜市立小机小学校</u>** **（応募者）プレゼンテーション** **＜質疑応答＞** （為崎委員）最初は外部が企画して始まったプロジェクトを、学校内部に取り込まれたとのことですごいと思います。外部でやっていたことを学校内部に入れるというのはなかなか難しいことだと思いますが、組織の再デザインができた原動力というのは何だったのでしょうか。 （応募者）10 年くらい長く続けている中で地域に認められている活動であるということと、学校としてどうしていくか、学校側としても初期に始めた方々はいない中でどう継続していくかどうかというところで、地域コーディネーターの方がある程度責任を持ってやっていただけるという機会がありましたので、その

	方を中心として学校内でコーディネートしていく形に変えていこうと、そうする方が持続可能になるということで進めてきました。 （為崎委員）特に外部の方からの抵抗感というのはなく、学校がそういう形で行うことを受け入れていただいたということなのでしょうか。 （応募者）公園の方もいろいろな形で外に出していきたいという思いがあったり、サクラソウ会も高齢化していく中で自分たちが直接行うというよりは呼ばれて行く方がよいという判断があったと思います。 （川村委員）サクラソウというと墨田区などがあると思いますが、そういうところとのつながりはありますか。 （応募者）あくまで流域ごとに活動していることが多いようなので、横浜サクラソウ会として鶴見川流域にて活動しています。学校としてはつながりがありません。 （鈴木委員）鶴見川は身近で親しみがありますが、反乱行で遊水地になっている場所です。今回はサクラソウということですが、サクラソウ以外の植物、ハマカンゾウなど、他の取組予定はありますか。 （応募者）本校では直接的に植物を増やしていくような活動は取り入れていません。KRC さんに協力いただき､緑の学校ということで鶴見川に対する意識を高めようという活動をしたり、また、そこに生き物がたくさんいるということを総合の時間で扱ったりしています。また、今後のこととして、これまで５～６年生で取り組んでいましたが、多忙な学年ということもあり、２～３年生による取組へと学年を下げました。絶滅危惧種の意味がなかなかわからない年齢ですが、はありますが、むしろとても大事にしてくれます。一昨日、今年初めて鉢植えを行いました。３年生は地域に出る機会が多くなる学年ですので、その前に行うというやり方でデザインしていけば、意識が変わっていくのではないかと考えています。 （戸川委員長）バトンがつながっていくようですね。１年間の中で、６年生が育てて、それを植えるのは５年生ということですか。 （応募者）今は来年用に準備しているところになります。 （北村委員）学校としてサクラソウに力を入れているということがわかりました。児童が自発的にこれをやりたいと言うなど、自主性が芽生えたという事例がありましたら教えてください。 （応募者）昨年、一昨年のことになりますが、地域の地区センターに鉢植えの花を持って行って飾っていただきました。プランターを置こうとしたときもありましたが、時期的に学年の変わり目だったため、なかなか難しかったです。今までは６年生が行っていたので、卒業後になってしまっていましたが、今後は２、３年生になれば在校生としてやっていける可能性が高くなると考えています。 **＜意見交換＞** （戸川委員長）サクラソウは咲くのがとても短いですよね。そのために一年間育んでいますが、何が行動変容になっているのだろうととても興味深く思いました。 （北村委員）この手の絶滅危惧種の問題はとても難しいと思っています。花に着目

するのはよいと思いますが、環境をどう作っていくかということに広がりが出てくるともっとよいと思います。管理をどうしていくか、サクラソウはどういうところに生えるのか、花だけでなく、例えば元々サクラソウは品種が多いのですが、それを戻すということはどういうことか、多様性という観点からもっと深められることがあっておもしろそうだと思います。これをきっかけにもっといろいろなことができるのではないかと思いました。

（戸川委員長）今後、学年が下がると携わる時間が長くなるでしょうから、その点は興味深いですね。

（為崎委員）逆に危惧するのは、先ほど先生が説明した中にもありましたが、２～３年生に実施学年が下がることでの変化です。理解することや教え方が変わってくるだろうと思います。今後、学年が下がっても同じような価値や追求が継続できるとよいなと思いました。また、継続性の観点から先ほど質問させていただきましたが、継続させるために学校が主体になって動いてきちんと仕組みを作り上げたことが非常にすばらしいと思いました。

（川村委員）サクラソウ会との関係の中で、自発的にという話がありましたが、そうするとサクラソウ会の方はどうなったのか気になりました。先ほど申し上げた墨田川や荒川など、もう少し大々的に保全活動しているところとのつながりはどうなっているのか気になり質問したのですが、残念です。

（委員）**採点**

３　生物多様性特別賞審査

（戸川委員長）これより「生物多様性特別賞」について審議します。事前審査の結果について、事務局から説明をお願いします。

（事務局）事前審査における生物多様性特別賞への推薦があった応募者は、NPO 法人海の森・山の森事務局様、特定非営利活動法人　ぷらっと様、一般社団法人里海イニシアティブ様、横浜市立小机小学校サクラソウプロジェクト様、横浜市立金沢小学校様です。それでは審査をお願いします。

（戸川委員長）今回は５団体を事前に推薦いただきました。一つずつ協議していきたいと思います。

＜意見交換＞

（戸川委員長）NPO 法人海の森・山の森事務局さんから意見交換したいと思います。

（石原委員）私が推薦させていただきました。応募書類にありますように幅広い年代、世代、多くの企業を巻き込みながら積極的に活動されていて、他の団体の模範となると思います。発足当初から 10 数名だった会員が 210 何名に伸びており、積極的に地域と関わってコミュニケーションをとっています。その中で子どもたちが中心になって環境学習、自然観察会などの実施、大岡川の清掃を始め、茅ヶ崎海岸、三浦市の城ヶ島まで広範囲にわたっての活動、そういったところで生息する動植物の生息環境の改善に努めるなど、地元に限らず広範囲な活動実績について評価させていただきました。子どもたちの想像力を埋もらせ

	ることなく、地域や企業を巻き込みながらこの団体が中心になって、それぞれの橋渡し的な存在となって一緒になって行動していることについて評価しました。 （戸川委員長）いろいろなところでごみ拾いということから始まっていますが、ごみ拾いしていく中で多様な生物を見つけることができたという点、応募書類にもしっかり記載されています。石原委員のおっしゃるとおり多様性という点では評価できます。 （戸川委員長）次に特定非営利活動法人　ぷらっとさんについてお願いします。 （為崎委員）私が推薦させていただきました。ビオトープを整備して生物の多様性の保持を図っていることに加え、外来種の駆除などをしていて、そのはく製を展示して子どもたちに環境意識を持たせています。その結果、子どもたち自身が「生き物を持ち出さない」という看板を立てていて、活動全体がバランスよく、観測にとどまらず、自ら環境整備していたり、外来種を除去したり、いろいろな活動をしているということで推薦しました。他にも目にとまった応募者があり、今回は比較が難しいなと思いました。突出して重点を置いてという応募者がいなかった中、バランスがよいということで推薦しました。 （北村委員）特定非営利活動法人　ぷらっとさんの活動は為崎委員がおっしゃったように多様性の中で、一つだけでなく全体でバランスがよく、理解が進んで子どもたちの行動につながっている点がよいと思いました。バランスという点でそのとおりよい活動だと思います。 （戸川委員長）次の一般社団法人 里海イニシアティブさんについてお願いします。 （北村委員）私から推薦させていただきました。今回はいろいろな応募者がいる中、どこが一番おもしろいかなと考えたとき、里海イニシアティブさんの昆布の取組になりました。昆布のことでこんなにも多様性について考えられるのだというくらいしっかり書かれていました。ほかの生き物との関わりもきちんと記載され、多様性を守ることだけでなく、多様性を守った結果 CO_2 が無くなるのだとか、大事なのは多様性を守るということだけでなく、多様性をなぜ守るのか、人間に還ってくる部分があるからということがしっかり記載されていて、深い理解のもとに作られていたと思います。昆布と多様性に対する深い理解があった点を見て取ることができ、よいと思いました。変化球のようなところはありますが、とても熱心に考えられていたと思います。 （戸川委員長）横浜市立小机小学校サクラソウプロジェクトさんについてお願いします。 （川村委員）私が推薦しました。非常に悩みましたが、準絶滅危惧種を扱っている点が直球ということで、成果を考えるとサクラソウしかないかと思い推薦しました。 （北村委員）川村委員にお聞きしたいのですが、小机小学校さんは生物多様性の取組があまりしっかりと書かれていなかった印象です。そういった点も汲み取って評価されているのはすばらしいと思いますが、書いていないところをわざわざ拾われたのは意味があるのでしょうか。 （川村委員）生態系の絶滅危惧種が問題になっている状況で、こうした直球の取組

	を行っていること、また、今日のお話を伺って小学校で自主的に持続していこうとしていること、特にサクラソウに関しては日本の河川敷で東京近辺の河川敷でも再生に取り組んでいる団体がある中、小学校が中心になって実施しているという点がよいと思いました。 （戸川委員長）子どもたちの成長の中のどこでスイッチが入るのだろうという期待感があり、すごいと思います。絶滅危惧種に焦点を当ててして活動しているという点をもっと聞けたらおもしろかったと思います。 （戸川委員長）次に、横浜市立金沢小学校についてお願いします。 （鈴木委員）小学校や子どもたちに一番近い場所でこういった活動が広がってほしい、総合学習の時間にもっと現場やフィールドに出て行ってほしいという思いから推薦しました。今回は海が近い学校ならではの取組ですが、総合学習が横浜でしっかりと広がるとよいなと思いました。 （戸川委員長）「海のゆりかご」という言葉が素敵ですよね。どのようについたのかと伺いたかったですが、時間の関係で聞けずに残念でした。 （北村委員）元々、アマモは「海のゆりかご」と呼ばれています。アマモ場があると小さな魚が入ってきてそこで育つことができるので、小さな魚が育ちやすいということで「ゆりかご」とよく表現されます。 （戸川委員長）すべて終わりましたが、ほかにありますか。 （為崎委員）海の森・山の森事務局さんは多様な取組で、特定非営利活動法人　ぷらっとさんは多様性に関する総合的な取組、残りの候補３つが何かに特化した取組、昆布、サクラソウ、アマモに関する活動となっています。これらをどう判断するのかというのが難しく、専門家の北村委員のご意見を聞きたいと思います。どちらがよいという話ではなく、どちらも価値がある活動ということでよろしいでしょうか。 （北村委員）活動に関してどちらに価値があるということはないと私は思います。どちらもよいと思います。ただ注意していただきたいのは、一つの種に特化したときに、一つの種のことだけでなく、その先が見えるかどうかが多様性において大事だと思います。そういう意味では、３つとも一つの種に特化していますが、先が見える活動でしたので、どれが選ばれても相応しいと思っています。以上が私の結論ですが、好みや、全体を守っているというのも大事ですし、専門的に掲げたこともよいことだと思います。 （戸川委員長）賞の基準を読むと、「生物多様性の保全・再生・創造に特に貢献していると評価される者」となります。そこで皆さんの見地を生かしていただけると思います。 （北村委員）個人的に今回は少しずつ多くの方が生物多様性について書かれていて、全体的に非常に良かったと思います。それでもまだ書けることはあると思うところがプレゼンからも伝わってきましたので、ぜひ、生物多様性の意識を高めてほしいと思いました。また、ここで出てきている５つの候補は、選びにくい中では少しずつ抜け出ていたと思います。問題は「該当なし」がどういう扱いになるのか、審査の方法をお伺いしたいです。

	（戸川委員長）事務局にお尋ねします。「該当なし」はどういう扱いになりますか。 （事務局）現時点での「該当なし」についてですが、審査基準において生物多様性特別賞の２番のところに書いてございますとおり、「各委員が、評価基準にしたがって全応募者から１者を推薦する」とありますので、基本的には１者を推薦していただきます。「該当なし」というのは、予めの審査の時点ではありえますので、今の時点で意見が変わらず、「該当なし」とすることも選択肢の一つとしてあります。今の皆様の討議を受けて、この後投票欄のどれかに丸を付けていただきます。集計して同票の場合は決選投票となります。一団体が最も票を集めた場合には、生物多様性特別賞が妥当かをご討議いただきます。したがって、この時点では５団体と「該当なし」が選択肢としてあるということになります。 （北村委員）そうなると、「該当なし」に一番票が集まると今回は該当なしということになりますか。 （事務局）やむを得ずそうなるかと思いますが、特別賞を置いている意図から、どちらか１団体が選ばれることが事務局としてはありがたいです。 （委員）**投票** **４　第 27 回横浜環境活動賞受賞候補者の決定** （戸川委員長）受賞候補者の決定を行います。はじめに、企業の部について、事務局から集計結果を報告してください。 （事務局）**採点結果を表示** （戸川委員長）審査基準に基づき、５団体とも 15 点以上ですので、実践賞の候補とします。 （委員）異議なし （戸川委員長）次に、大賞候補です。審査基準により、点数が一番高い者が大賞候補となりますので、最高得点の株式会社協進印刷さんを大賞候補とします。 （委員）異議なし （戸川委員長）続いて市民の部の結果をお願いします。 （事務局）**採点結果を表示** （戸川委員長）全団体が 15 点以上ですので、全て実践賞の候補とします。 （委員）異議なし （戸川委員長）次に、大賞候補です。審査基準により、点数が一番高い者が大賞候補となりますので、最高得点の NPO 法人海の森・山の森事務局さんを大賞候補とします。 （委員）異議なし （戸川委員長）続いて、児童・生徒・学生の部の結果をお願いします。 （事務局）**採点結果を表示** （戸川委員長）審査基準に基づき、２団体とも 15 点以上ですので、実践賞の候補とします。 （委員）異議なし （戸川委員長）次に、大賞候補です。審査基準により、点数が一番高い者が大賞候

	補となりますので、最高得点の横浜市立金沢小学校さんを大賞候補とします。 （委員）異議なし （戸川委員長）続いて、生物多様性特別賞の集計結果をお願いします。 （事務局）ＮＰＯ法人　海の森・山の森事務局様が１票、特定非営利活動法人　ぷらっと様２票、一般社団法人　里海イニシアティブ様１票、横浜市立小机小学校サクラソウプロジェクト様が２票、横浜市立金沢小学校様が１票です。該当なしは０票です。特定非営利活動法人　ぷらっと様と小机小学校サクラソウプロジェクト様が２票ですので、再討議となります。 （戸川委員長）２団体について討議になりますが、いかがでしょうか。 （為崎委員）委員それぞれがどちらを選ぶか、最終投票でどちらか決定してよろしいかと思います。 （戸川委員長）では最終投票ということでお願いします。 （委員）**投票** （戸川委員長）事務局から集計結果を報告してください。 （事務局）特定非営利活動法人　ぷらっと様３票、小机小学校サクラソウプロジェクト様４票です。 （戸川委員長）それでは、生物多様性特別賞の候補は、小机小学校サクラソウプロジェクトとします。 （委員）異議なし （戸川委員長）これですべての審査を終了しました。何かご意見があればお願いします。ないようですので、以上で議事を終了します。事務局に戻します。 （事務局）本日の会議録については、公表となります。また、応募書類につきましては、規約・定款、役員名簿、収支書類及び個人情報を除いて、ホームページに掲載させていただきます。ご了承くださいますよう、お願いいたします。 　本日の審査委員会の審査をふまえ、市長が受賞者を決定します。詳細については、別途ご連絡いたします。事務連絡は、以上です。 　審査委員の皆様並びに応募者の皆様には長時間にわたるプレゼンテーション及び審議をいただき、ありがとうございました。以上をもちまして、第 27 回横浜環境活動賞審査委員会を閉会いたします。ありがとうございました。
資　　料	１　次第 ２　資料１　横浜環境活動賞審査委員会　委員名簿 ３　資料２　横浜環境活動賞実施要綱 ４　資料３　横浜環境活動賞審査委員会運営要綱 ５　資料４　審査基準（市民の部／企業の部／児童・生徒・学生の部／特別賞） ６　資料５　応募者一覧（プレゼンテーション 発表順） ７　（参考資料）これまでの受賞者一覧